

書評

秦 温信著「北国から、さわやかな風を －医療・保健・福祉の原点を求めて－」

札幌北楡病院外科顧問 水戸 勉郎
旭川医科大学名誉教授

初夏のラベンダー畑の背景に朝雲が大雪山連峰にたなびく清々しい表紙を開くと目次が目飛び込む。序章「神の館に・・・」、から5章、さらに終章「医療人のあり方とBUSHIDO」とある。各章の脈絡がつくのかと少々不安を抱かせる。しかし本の題名どおり語りかけるような流麗な文脈は“さわやかさ”を感じさせ一気に読み終える。私の危惧は文もさることながら序章から終章までの構成・展開の妙で消え失せた。

幕末、將軍の侍医・高松凌雲が「神の館」(邦訳でパリ市民病院)に留学し、武士道精神が戦争を超えた普遍的人間愛に昇華し、病院のあり方の本質に触れること。この高松の医療人としての自覚と生き様が今日の札幌社会保険総合病院の創設者・関場不二彦先生に共有されるなど、一病院の歴史的事項を超えて興味深いものであった。

さらにパリ日本館・森有正館長との出会いで体験と経験の概念の相違を学び、経験こそが個人が他者とつながる通路であるとし、他者に“開かれた”病院として地域医療があるとするくだりは著者のパリ留学経験による医療人としての考え方・哲学と読みとれた。

キーワードの一つ“開かれた”が織物でたとえると横糸となり、人間愛・終章にある新渡戸稲造の“BUSHIDO”が縦糸に相当する。縦糸と横糸の織りなす紋様として医療連携、カルテ開示…、などが各章を彩る。

智、仁、勇を兼ね備えた人格、世界に開かれ



た普遍的精神である新渡戸の“BUSHIDO”を今こそ医療人に求められるとする章で締めくくられていた。

読み終えると北国の夏、朝夕の冷風の心地よさすら感じた。それは柔道家でもある著者が失われかけた医療人を含めた人々の精神的支柱を説くだけでなく、それを昨今の厳しい医療界でどう具現化するかを示唆し、目ざめさせてくれる書であったからであろう。

発行所 悠飛社 ☎03-5327-6052

定価 1,680円